

11 教員組織

進捗状況報告

【11.0.1】 【11.0.2】 現在理工学部専任教員一人当たりの担当コマ数は平均10コマであり、他学部に比べて非常に高い。教育の人的支援としては、理工学部の英語教育システムが特色GPに採択されたことに伴い I E F L 2名の増員が行われ、英語のクラスは少人数化が進んだ。開講科目やクラス数の見直しによって、一部専任教員の担当科目数が減り負担軽減となったが、本質的な負担軽減とはなっていない。全国的な少子化に伴い大学は改革期にあり、教育以外の業務はむしろ増加する傾向にある。2009年度の新学科等開設へ向けて、教育の人的支援体制として各学科専任の教育技術主事・実験助手2名、契約助手1名を確保する方向で検討が進められている。

【11.0.3】 2007年度より、教授、助教授、専任講師から教授、准教授、専任講師、助教へと組織体系の変更が行われ、昇任に際しての基準の明文化が行われた。新任の専任教員は2006年度1名、2007年度2名あったが、いずれも公募で採用されており、人事の公平性・透明性は保たれている。これら3名のうち英語教員は女性であり、理工学部における女性専任教員は合計3名となったが、まだ女性教員の割合は小さい。契約教員の採用については、英語常勤講師はすべて公募で採用している。契約助手についても、2006年度1名、2007年度1名採用しているが、いずれも公募であり公平性は保たれている。優秀なネイティブの英語常勤講師を確保するための方策としては、2005年度より英語常勤講師（I E F L）が理工学部所属となり人事関係も言語教育研究センターの手を離れたのに伴い、教務主任経験者と英語教員からなる常設の I E F L 人事委員会を設置し、優れた人材の確保に努めている。しかし、7名の I E F L は契約教員であるため、その確保には不安定性が常につきまとしており、今後とも優れた人材の安定的確保のためのシステム作りを進めていく必要がある。

【11.0.4】 教員の教育研究活動の評価については、業績リストの更新の徹底やFD委員会における評価方法の検討が行われているが、詳しくは「6教育方法・内容」参照。

学内第三者評価

認証評価では「レベルの高い優秀な教員を揃えており、そうした人材の確保のために特別な努力がなされていることをうかがわせる。昇任人事は教育・研究業績を勘案して行われている」と高い評価を受けており、2007年度より昇任に際しての基準の明文化がなされるなど、人事の透明性の高い点は評価できる。その一方で、専任教員の担当コマ数が平均10コマとなっており、教育負担の軽減が課題である。